

『マクベス』の翻案

Adaptations of *Macbeth*

石原 万里

福島工業高等専門学校一般教科

Mari Ishihara

National Institute of Technology, Fukushima College, Department of General Education

(2015年10月21日受理)

The production of *Macbeth* starring Sasaki Kuranosuke, directed by Andrew Goldberg, produced by Parco Theatre in July, August 2015, was innovative in a sense that one actor played 20 roles including Macbeth. By comparing this production with other adaptations of *Macbeth*, I aim to show paradoxically how close this production was to Shakespeare's original version.

Key words: Shakespeare, *Macbeth*, adaptation, Andrew Goldberg

1. はじめに

2015年7、8月のパルコ・プロデュース公演『マクベス』は、主演の佐々木蔵之介が、主人公のマクベス以下20人の役を一人だけで演じた革新的な『マクベス』の「翻案」作品である。ここで、私は、あえて「翻案」という言葉を使ったが、本小論では、この作品が精神病患者が紡ぎだす物語という革新的な全く新しい『マクベス』作品となっているにも関わらず、逆説的に、シェイクスピアのオリジナル作品に近い事を、『マクベス』の他の翻案作品と比較しながら検証する。

2. 翻案とは何か

翻案とは、オリジナル作品を土台にして、異なる作品を生み出すことを言う。翻案の中には、原作の台詞にわずかに手を入れるものから、結末を全く変えてしまうような改作まで、その程度はさまざまである。シェイクスピアの改作として最もよく知られているのが、1661年のタイトの改作版『リア王』である。リア王が老年の苦しみを経て死んでいくシェイクスピアの原作とは違い、改作では、エドガーとコーディリアの恋物語が付け加えられ、リアが老年の幸せを享受する結末となっている。この改作は、観客に受け入れられ、17世紀から19世紀中頃まで、イギリスにおいて上演されることになる。

結末を大きく変えることはなくても、原作に数行付け加えた例もある。『マクベス』においても、俳優のギャリック (David Garrick) が、1748年にマクベスを演じた際

に、死に際の言葉を付け加えており、ケンプル (Kemble) もそれにならっている。^① これは、主人公の最後があっけなさすぎると感じた役者が、観客がマクベスに共感をもつことができるようにと行った改訂である。

『マクベス』の映像版として、おそらく最も成功していると考えられている黒澤明監督の『蜘蛛巣城』は、舞台を日本に移し替え、登場人物の名前を変え、作品の流れにも少しずつ変化を加えているが、これは翻案の第一級作品と考えて良いだろう。日本の高校演劇の作品の中には中屋敷法仁作『贗作マクベス』と銘打った作品も存在する。この作品では、シェイクスピアの『マクベス』を上演しようとしている高校生達が、稽古をしながら、作品をどんどん好きなように変えていく過程が描かれることになる。この作品も、『マクベス』の作品に触発されて出来上がっている作品であり、翻案の一つと考えられる。

それでは、どの程度台詞を変更したら、またどの程度設定を変更したら翻案となるのだろうか？現代服シェイクスピアは、翻案には入らないのだろうか？そして、オリジナル作品通りとは何をもってオリジナル作品通りとと言えるのだろうか？

まず、現代服シェイクスピアについて考えてみたい。現代服でシェイクスピアを上演するには、二つの全く異なる理由がある。一つは資金面で、17世紀イギリスの衣装を用意できなかった場合である。1970年代、出口典夫率いるシェイクスピアシアターは、ジーパンシェイ

クスピアと呼ばれ、当時の若者のファッションであったジーパンをはいた役者がシェイクスピアを演じていた。歌舞伎をジーパンで演じることは不可能だが、シェイクスピア作品は、現代語に通じる初期近代英語で書かれているため、ジーパンで演じてもおかしくは感じられない。現代服シェイクスピアの許容が、シェイクスピアを演じやすくしている。そうして、資金があるなしにかかわらず、現代服でシェイクスピアを演じる場合がでてくる。この場合は、シェイクスピアを自分たちが生きている時代に少しでも近づけたいとする意図が働いている。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー (Royal Shakespeare Company) は、シェイクスピアを演じる英国の王立劇団ではあるが、現代服のシェイクスピア上演が盛んである。現代服と言っても、第一次世界大戦前、1930年代、第二次世界大戦中、1970年代など、様々な時代の衣装を劇団として揃えている。日本でも、蜷川幸雄の演出するシェイクスピアは、現代服のものもあれば、日本の着物姿で演じるものまで様々である。以上述べたように、シェイクスピア作品は、さまざまな時代、さまざまな設定で演じられているが、現代服シェイクスピアは翻案とは呼ばない。それはなぜか。シェイクスピアが書いたままの台詞を使っているからである。登場人物の名前を変更することもない。

「NINAGAWA マクベス」は、1980年に日生劇場で初演を迎え、その後、1985年にはエディンバラで評判を博し、1987年にはロンドンのナショナルシアターに招待され、日本の蜷川を世界に知らしめた作品である。仏壇の舞台、桜の花は日本をアピールした作品であったが、その美しさは多くの人たちの心に残る芝居となった。「NINAGAWA マクベス」では、お雛様よろしく、安土桃山時代の髪型と着物に袴姿のマクベスとマクベス夫人がいるが、その衣装がおかしいと非難されることはない。蜷川幸雄演出のシェイクスピアは、蜷川の名前を冠して、日本でも、イギリスでも受け入れられてきている。そこには、翻案かどうかを問う必要はない。蜷川のシェイクスピアは、シェイクスピアのひとつの解釈として認められている。それは世界が、シェイクスピア作品そのものを認め、その幅の広さを享受しているからである。

一方、黒澤明監督の「蜘蛛巣城」は、『マクベス』を日本の戦国時代に移しているだけでなく、登場人物の名前を変え、魔女も能の安宅に出てくるような老婆へと変えている。武将鷲津武時(マクベス)と、三木義明(バンクオー)は、蜘蛛手の森で、老婆に会う。老婆は武時

は「今宵からは北の館の御殿様、やがては蜘蛛巣城の御城主」と不吉な予言をする。老婆はさらに、義明は一の砦の大将となり、子供はやがて蜘蛛巣城の御城主になるだろうと言う。武時の妻の浅茅(マクベス夫人)は、武時に向かって、義明が裏切ってその老婆の予言を漏らしたら、自分たちは身の破滅、北の館が危ないと言って、大殿殺しをそそのかす。浅茅は妊娠しており、その妊娠が、義明の子孫が蜘蛛巣城の主になることに、耐えられないという設定も付け加えられる。マクベスが自ら三人の魔女に会いに行き、未来を予言してもらった時には、予言が三つあった。「蜘蛛巣城」では、蜘蛛手の森が蜘蛛巣城に迫ってこなければ武時は敗れない、と予言は一つだけに限られ、森が動いていることに半狂乱になった武時は、敵と戦うこともなく、味方から弓を射られて命を落とすことになる。

『マクベス』は、シェイクスピアが書いた作品の中でも、劇的で、観客に好まれる作品であるが、作品をプロデュースする立場にいる俳優、演出家、映画監督にとっても想像力を掻き立てられる作品である。翻案とは、原作に手を加えて作りだされた別の作品であるが、設定を変え、言葉を付け加えて行くことで、シェイクスピアの作品というよりも、ギャリックの、蜷川幸雄の、黒澤明の、中屋敷法仁の作品となっていく。

3. スコットランド・ナショナル・シアター版 『マクベス』

2015年にパルコ劇場で上演された『マクベス』は、2012年スコットランド・ナショナル・シアター (The National Theatre of Scotland)版『マクベス』の日本公演である。ジョン・ティファニー (John Tiffany)とアンドリュー・ゴールドバーグ (Andrew Goldberg)の共同演出、アラン・カミング (Alan Cumming)主演で、グラスゴー公演のあと、ニューヨーク公演を行っている。日本公演では、アンドリュー・ゴールドバーグが単独で演出し、主演は佐々木蔵之介である。一人の役者が主人公のマクベスを含めて20人の人物を演じるために、いくつかの演出上の工夫がある。

第一の工夫は、この作品が精神病棟にいる一人の男が紡ぎだす物語になっていることである。観客が最初に目にするのは、緑色のタイルの壁のヴィクトリア朝の精神病棟の中の一人の医者と一人の看護婦と一人の名もなき男である。男が血のついた服を脱ぎ、病院が用意した白の病院服に着替えると、二人は階段を上って、出て行き部屋に鍵がかけられる。舞台奥の壁には、大きな監視

窓があり、医師が姿を現し、患者を観察する。このようにして、医師が見つめ、観客が見つめる出口のない病室の中で、男はシェイクスピアの『マクベス』を一人で語り始める。佐々木蔵之介演じる狂人の男は、ある地点まで歩いて行きくると振り返り、違う人物になったり、落語のように、顔の向きを右と左に変えることだけで、二人の人物の会話を成立させたりする。その変わり身が面白くて、最初は役者の身体と台詞の違いの面白さに、観客だった私は集中していった。

第二の工夫は衣装、大道具、小道具である。もちろん、精神病棟であるから、病院服以外の衣装もなければ、病院付随以外の大道具もない。あるのは、簡易ベッドが三つ、診察台とテーブル、いくつかの椅子、そして洗面台にトイレとバスタブである。マクベス夫人の登場は、バスタブに漬かる夫人がマクベスからの手紙を読む所から始まる。濡れた髪をなでつける動作、水に濡れた身体は、それまで演じられていたマクベスや他の男性とは異なり、生々しく観客の目をとらえてしまう。バスタブから上がり、マクベスとマクベス夫人が会話を交わす場面では、たった一枚のバスタオルが男から女への変化を表していた。タオルはマクダフの城の急襲の時にも、夫人や赤ん坊を表すのに効果的に使われていた。小道具としては、狂人が看護師に取られまいと必死に守った紙袋には、人形が入っており、この人形はマルカムになる。精神病院に限定したことで、他に大道具、小道具もないことから、狂人の語る物語に、自然に観客が耳を傾けることになる。

第三の工夫としては、モニターによるクローズアップがある。舞台上部には、三台のモニターが設置され、常時患者の状態をカメラが監視していることが強調される。カメラは、ズームアウトして患者の病室での動きを写し出す時もあれば、ズームインして顔の表情を、しかも前から左から右からの表情を写し出す時もある。三人の魔女のシーンではこのクローズアップが効果的に利用されていて、三つのモニターに交互に三人の魔女が映っているかのような感覚に襲われる。ダンカン殺害のシーンでも、このモニターは大きな効果をもたらしていた。ダンカン殺しを躊躇するマクベスと、マクベスを叱咤するマクベス夫人のやり取り、そして、殺害の後、もう眠りがなくおびえるマクベスの顔にのみ光があたり、クローズアップされた表情に観客の目が奪われていた。その瞬間、狂人マクベスの叫び声とともに、電気がつき、狂人が手を見ると、手が血で真っ赤にそまっていた。

観客は、狂人が、精神病棟の中にある小道具のみを使って紡ぎだす物語に耳を傾け、その姿を、医師や看護婦と同じように、患者が閉じ込められた部屋の外から、時にはモニターを使ってクローズアップしながら、眺める。それは趣向として目新しいだけに留まらない。シェイクスピアの『マクベス』の解釈を浮き彫りにする試みでもある。

4. ひとりマクベスのドラマ

ひとりマクベスが、『マクベス』上演にとって画期的であった理由として、魔女とマクベス夫人とマクベスの関係について、そして、マクベスの「今日性」について考えてみたい。

三人の魔女は、マクベスが「コーダーの領主」「将来は王となるお方」と予言する。マクベスはそれを聞いて、自分もしかしたら王になるのではないかと思いはじめますが、功績をあげたマクベスが、自分の未来に関して、ふっと自分の心の奥底にある野心に気づいてしまったという解釈もある。三人の魔女の扱いは、舞台によって異なるが、マクベスの心の内を代弁する超自然的存在と考えることができる。それは、幕あきの台詞からも明らかである。三人の魔女は、*Fair is foul, and foul is fair. Hover through the filthy air.* (1.1.9)「きれいは汚い、汚いはきれい」または、「良いは悪いで悪いは良い」という言葉を残して消えていく。F音が重なる、耳に心地よいこの台詞は、魔女の世界においては、価値観が反転することを教えてくれる。それに対し、マクベスは、*So foul and fair a day I have not seen.* (1.3.38)「これほど、良くも悪くもある日は初めてだ」と言いながら観客の前に初めて登場することになる。まるで、すでに魔女がマクベスに乗り移っているかのような錯覚を覚える。なお、魔女に接触するという時点で、マクベスは魔女の一味であるとする解釈もある。つまり、魔女はマクベスの分身となる。このプロダクションでは、狂人はマクベスを演じ、三人の魔女を演じるが、魔女がマクベスの内面に潜む野心である考えれば、マクベスが魔女を同時に演じてもよいことになる。

野心を自覚してしまったマクベスは、手紙でそのことを妻に打ち明けると、妻はその夢の実現に向かって行動を開始しようとする。ダンカン王の殺害に躊躇する夫マクベスをマクベス夫人は叱咤する。

Macbeth: If we should fail?
Lady: We fail? (1.759-60)

マクベス もししくじったら、俺たちは？
マクベス夫人 しくじる、私たちが？
 (第一幕第七場)

翻訳家の松岡和子氏は、この *we* に注目して、この夫婦は、二人で一人であることを強調している。彼らは共犯であり、いつでも夫唱婦随であった。そして、シェイクスピア作品の主要人物の中で、名前を持たずに *Lady Macbeth* と呼ばれるのは、マクベス夫人ただ一人なのである。劇の前半は主導権を握っていたマクベス夫人が、劇の後半では夢遊病者となっていく、マクベスとマクベス夫人が立場を逆転していく。これもまた、この二人が二人で一人であることの現れである。

マクベスと魔女が、そしてマクベス夫妻が複数でありながら、お互いを補完する存在であることを考えると、ひとりマクベスは、この芝居のテーマを具現化したとも言える。

『マクベス』は、『リチャード三世』とあらすじにおいては、良く似ている。主人公は、権力を握ろうと罪を犯し、一度権力の座につくと、その権威を脅かす相手の殺害を繰り返し、最後には破滅する。だが、マクベスには、木下順二が使った言葉をそのまま使うと「今日性」がある。^②ダンカンの死が明らかになった、次の日の朝のマクベスの台詞は以下の通りである。

Had I but died an hour before this chance,
I had lived a blessed time, for from this instant
There's nothing serious in mortality;
All is but toys; renown and grace is dead,
The wine of life is drawn, and the mere less
Is left this vault to brag of. (2.3.92-97)

こんなことになる一時間前に死んでいれば、私は幸せな生涯を送ったと言えただろうに。今からはこの世に大切なものなど何ひとつない。すべてはガラクタ同然。名誉も人徳も死に絶えた。いのちの酒は汲みつくされ、この丸天井の下の酒蔵に残っているのは澱ばかり、誇れるものは何もない。

(第二幕、第三場)

表向きは、ダンカンの死を悼む一人の臣下の言葉であるが、もちろん、マクベスが罪を犯してしまった自分に向けて話している言葉である。そして、この時から、マクベスは自分の人生が自分のものではないような感情を絶えず持ち続けることになる。自分で生き方を決定

し、自分で自分の人生を引き受けてゆかなくてはならなかったのに、マクベスの中で、矛盾が起こっていく。行動している自分を、もう一人の自分が見つめているような、感覚に付きまといわれることになる。

マクベスの最後の独白は、作品の中でも一番有名で、多くの作家が引用しているが、ここにあげたいと思う。

Tomorrow, and tomorrow, and tomorrow,
Creeps in this petty pace from day to day,
To the last syllable of recorded time;
And all our yesterdays lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle,
Life's but a walking shadow, a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more. It is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury
Signifying nothing. (5.5.18-27)

明日も、明日も、また明日も、
とぼとぼと小刻みにその日その日の歩みをすすめ、
歴史の記述の最後の一言にたどり着く。
すべての昨日は、愚かな人間が土に還る
死への道を照らしてきた。消えろ、消えろ、
束の間の灯火！

人生はたかが歩く影、哀れな役者だ、
出場のあいだは舞台上で大見得を切っても
袖へ入ればそれきりだ。
白痴のしゃべる物語、たけり狂うわめき声ばかり、
筋の通った意味などない。(第五幕第五場)

権力を握った瞬間に、眠りを殺してしまったマクベスは、自分の人生そのものも失ってしまった。人生は影であり、意味などない白痴のしゃべる物語にすぎない。罪を犯した人物が破滅への道をたどるという点で、リチャード三世とマクベスは似通っているが、リチャードが、殺害した多くの人たちに呪われていて、誰も自分を愛してくれないと言って人生を終えていくのに対し、マクベスは、自分の人生を常に見つめ、そして自分の人生の意味を見いだせず、絶望感にさいなまれていく。

佐々木蔵之介演じる狂人が、マクベスを演じるこの作品は、舞台の上で入れ子構造になっているが、その狂人がどんな罪を犯して、この精神病棟にいるのかを観客は知らない。しかしながら、狂人が演じたマクベスが彼自身の物語なのか、そうではないのかが分からな

いところに、この演出の面白みがあるのかもしれない。行動と想いが乖離してしまったマクベスを、狂人がたった一人で演じている。狂人は、ひたすらマクベスの話を演じ、自分自身の中にある自分を見つめようとしている。その人生は自分の人生のようであり、他の人の人生のようにも感じられる。『マクベス』は内省のドラマである。マクベスに「今日性」があるのは、このひたすら内省を繰り返す態度にある。自分の人生が、役者の演じる人生に過ぎない、白痴のかたる意味もない物語だとの境地に至ったマクベスの物語を、狂人が語る物語にしたことで、この「翻案」は『マクベス』のドラマを浮き彫りにしている。

5. まとめ

多くの翻案が、状況、設定を変化させることにより、場面や言葉を付け足していくことになるのに反して、この作品は、シェイクスピアの台詞に言葉を付け加えることよりも、その言葉をそぎ落としていくことで、テーマを浮き彫りにしている。医師と看護師は観客が聞き取れるほどの台詞はほとんど発することはない。彼らは、マクベスが幻覚を見てショックを受けている時に、かけつけ、鎮静剤を打って、患者に向かい、眠りが必要、とつぶやく。これはマクベス夫人の言葉である。この作品は、シェイクスピアが書いた台詞を再構成して出来上がったのである。マクベスをたった一人で演じるというこの革新的なマクベスは、大道具も小道具も、そして役者も最小限にすることで、逆にマクベスの内省のドラマを描いているのである。

狂人の最初の言葉が、「いつまた会おう、三人で」という魔女の言葉であり、狂人がバスタブでおぼれてしまったのではないかと思ひ駆けつけた医者と看護師により、命を吹き返した狂人が、最後につぶやくのも、「い

つまた会おう、三人で」である。円環は、芝居がまた同じように続いていくかの錯覚を観客に与えるが、シェイクスピアの仕掛けた魔女の呪いは、狂人マクベスに、人生の謎を考え続けさせることになるのである。

注

- 1) *Macbeth The Arden Shakespeare*, ed. Sandra Clark and Pamela Mason 2015参照。尚、英文と幕割、行数もこの版による。日本語訳は、松岡和子訳『マクベス』シェイクスピア全集3 筑摩書房 1996を使用している。
- 2) 木下順二 『マクベス』を読む 岩波ブックレット No. 228 (岩波書店、1991)

参考文献

- 1) 尾形敏朗 巨人と少年 黒澤明の女性たち (文藝春秋、1992)
- 2) 高校演劇 Selection 2004上 (晩成書房、2004)
- 3) 松岡和子 すべての季節のシェイクスピア (筑摩書房、1993)
- 4) Michael Mullin. “Macbeth on Film” *Literature Film Quarterly* 1 (1973)
- 5) Mark Brown. “Macbeth, National Theatre Scotland, Tramway Glasgow, review, (17.6.2012) Web.
- 6) Raymond J. DiSanza, ‘One Man Plays Many Parts: Looking back on Alan Cumming’s Mostly One-man *Macbeth*’ in *This Rough Magic*, Vol. 5, No. 1, (June 2014)
- 7) マクベス公演パンフレット (パルコ劇場、2015)
- 8) NINAGAWA マクベス公演パンフレット (Bunkamura シアターコクーン、2015)